



Title	中学生の仲間集団における排他性とその深刻化要因に関する検討
Author(s)	鈴木, 修斗
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16804号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16804
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99649
Type	doctoral thesis
File Information	SUZUKI_Shuto_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：鈴木 修斗

学位論文題名

中学生の仲間集団における排他性とその深刻化要因に関する検討

本論文の目的は、中学生の仲間集団（以下、グループ）を対象に、排他性がどのような場合に問題となるのかを明らかにすることであった。そのために、以下の研究を行った。

第1章では、そもそもグループとはいったい何を指しているのか、また、これまでの先行研究では、具体的にグループの排他性をどのように位置づけ、扱ってきたのかを整理し、これらのことに触れながら先行研究における概観とその問題点について明らかにした。その結果、排他性は、個人に帰属する排他性と集団に帰属する排他性の2つの観点から検討されていること、あるグループに所属すると、そのメンバーは、グループ外の者との関係をもてず、そのグループが孤立化してしまう点が問題にされていることが明らかとなった。その一方で、排他性に関する先行研究では、グループの孤立化を説明する上で重要であるはずの仲間を外に離さない集団規範について、その語りや項目の存在は見られるものの、排他性との位置付けについて明確に言及されていない問題も確認された。そこで、第1章では、新たな視点として、排他性の中でも、従来言及されてきた、グループ外の第三者がグループ内に入ってくることを阻害する要因を内関係阻害（以下、内阻害と呼ぶ）、従来明確に位置付けられてなかった、グループの仲間がグループ外の者と関係をもつことを阻害する要因を外関係阻害（以下、外阻害と呼ぶ）として新たに定義することとした。前者は、グループで一緒に過ごしているときに想定される一方で、後者は、メンバーがグループを離れて、グループ外の者と行動をとともにしているときに想定されて作用しやすい点で違いがあるが、先行研究の尺度では、両者の要因が区別できていない問題があった。そのため、内阻害と外阻害の視点から排他性の問題について検討していく研究の方向性を提案した。

第2章では、第1章の課題をふまえ、3つの目的を立てた。第1の目的は、排他性によるグループの孤立化を捉えるために、排他性を内阻害と外阻害の2つの観点から検討することの妥当性について明らかにすることであった。第2の目的は、排他性によるグループの孤立化はグループ内の孤立化も伴うときにより問題になると想定されるため、内阻害と外阻害の観点から排他性はどのような場合に関係性攻撃（仲間はずれなど）につながるのかを明らかにすることであった。第3の目的は、所属グループだけでなく周囲のグループの排他性に着目することにより、排他性はどのような場合に関係性攻撃を深刻化させるのかについて明らかにすることであった。これらの目的を明らかにすることにより、排他性がどのような場合に問題となるのかを明らかにしていくこととした。

第3章では、本研究の目的を達成する前に、基礎的な検討事項として、内阻害と外阻害を測定する尺度を作成した。そこで、最初に予備調査として外阻害を測定する暫定尺度を作成し（研究2-1）、次に予備調査をふまえて内阻害と外阻害から構成される排他性尺度を作成し、その実態を検討した（研究2-2）。その後、前述したように、グループの孤立化を内阻害と外阻害により説明できるという前提が妥当なのか検討するために、排他性とグル

ープ外の者との関わりおよび抑うつとの関係についてもあわせて検討した（研究3）。その結果、研究2-1からは、暫定項目を作成し、さらに自由記述を行い、外阻害の項目を追加した。その上で研究2-2では、排他性を内阻害と外阻害の観点から捉えることの信頼性および妥当性を確認し、排他性尺度の作成を行った。また、排他性は概ね左に偏った分布を示すことも明らかとなった。そして、研究3からは、内阻害というよりも外阻害が、グループ外の者との関わり、抑うつとの関係していることが明らかにされ、排他性に外阻害の観点を取り入れることの妥当性も示されたといえる。

第4章では、排他性がどのような場合に関係性攻撃につながるのかを明らかにするために、2つの研究を行なった。1つ目は、仲間はずれにする側の視点から見たときに、個人に帰属する排他性と関係性攻撃をすることはどのように関係するのかを明らかにした（研究5）。その結果、内阻害の高さはグループ内の関係性攻撃と関係するものの、その効果量は小さく、さらにはグループ満足感の高さとも関係していた。一方で、外阻害の高さについては、グループ内外の関係性攻撃と関係するうえ、グループ満足感の低さとも関係していた。このことから、内阻害はグループにとって肯定的な側面もあるが、外阻害は否定的な側面が大きいといったように同じ排他性でも、その側面によってグループへの影響が異なることが示唆された。2つ目は、仲間はずれにされる側の視点から見たときに、排他性と関係性攻撃をされることはどのように関係するのかを明らかにした（研究6）。その結果、内阻害ではなく、外阻害が関係性攻撃と関係していることが明らかにされた。また、男女で同じモデルが採択され、内阻害というよりも、外阻害が関係性攻撃と関係するという、変数間の関係性については男女で等しいということも示された。以上のことから、内阻害も関係性攻撃の原因となるものの、排他性が引き起こす問題という視点から見れば、仲間はずれにする側も仲間はずれにされる側の視点どちらにおいても、排他性の中でも外阻害がある場合に関係性攻撃につながるということが明らかにされた。

第5章では、排他性がどのような場合に関係性攻撃を深刻化させるのかを明らかにするために、学級における周囲のグループに着目して、排他性が関係性攻撃と抑うつとの関係に及ぼす影響について検討していくこととした。具体的には、排他性によるグループ間の移動の困難度を所属グループの外阻害と周囲のグループの内阻害に対する個人の認知でモデル化できると仮定した。また、どのような学級においていじめが深刻化するのかに着目するために、個人の認知の話だけではなく、グループ間の移動の困難度が高い学級、あるいは低い学級といった視点も考慮した。そして、グループ間の移動の困難度が高い子ども（学級）は、そうではない子ども（学級）より関係性攻撃と抑うつとの関係が強くなるという仮説を階層線形モデルにより検証した。その結果、個人のグループ間の移動の困難度の高さは、関係性攻撃と抑うつとの関係を調整しなかった一方で、学級のグループ間の移動の困難度の高さは、関係性攻撃と抑うつとの関係を調整し、グループ間の移動の困難度が高い学級において、関係性攻撃と抑うつとの関係が強いことが示された。また、関係性攻撃を受けているかに関係なく、子どもの周囲のグループの内阻害の高さが抑うつと関係していることも示された。以上のことから、排他性により、グループ間の移動のしにくい状態が学級に作り出されている場合には、関係性攻撃の深刻化に留意する必要があることが示唆された。

第6章では、これまでの結果をふまえて、排他性がどのような場合に問題となるのかについて深刻度が高い順にその要因をまとめるとともに、そのことをふまえて排他性研究における学術的意義および学校現場に対する実践的示唆、本論文の限界点について議論した。